

手をつけずに残された運河沿いに整備された遊歩道
向かいの建物は近代の歴史的建造物として評価されている北海製缶の工場
小林多喜二「蟹工船」のモデルともいわれている

運河の蘇生 都市の再生

小樽運河……昔の佇まいを残す北運河

それは淀んだ水面に投げ込まれた小石だった

運河を守ろう、町の記憶を語り継ごう、

運河は埋められても、人の心は埋められない……

祈りはまるで波紋のように静かに、しかし確実に、

ひろがり深まった、市民に、そしてこの国の人々へ。

思想が逆巻き、意志が炸裂し、情感が渦巻いた。

やがて、人の知恵と、技と、そして歴史への想いが、

確かな果実を産み落とし、育てることになった。

運河は傷つきながらも蘇った。

街は再び人々を呼び集めはじめた。

いま、すべての物音を吸い込む雪の襞ひだのなかに、

河岸を飛び交った荷揚げの響きや、

港を埋めた外国船の物憂い汽笛や、

空を貫く海猫の羽ばたきや、

それらが凝縮され、息をひそめ、

ただ、冬の静寂しじまのなかで、目覚めの刻ときを待っている。